

第59回農林水産祭

農林水産祭は、国民の皆さんに農林水産業と食に対する認識を深めていただくために、農林水産省と公益財団法人日本農林漁業振興会が共催して、昭和37年から実施しており、今年で59回目となります。

農林水産祭では、過去1年間の農林水産祭参加表彰行事において農林水産大臣賞を受賞された方の中から、天皇杯、内閣総理大臣賞及び日本農林漁業振興会会長賞が選ばれます。

林産部門では58の出品財の書類審査及び現地審査を経て、天皇杯に有限会社上原樹苗（福島県南相馬市）、内閣総理大臣賞に河合清氏、くに氏（ご夫婦での受賞）（大分県大分市）、日本農林漁業振興会会長賞に磯村産業株式会社倉渕事業所（群馬県高崎市）が選出されました。

天皇杯

有限会社上原樹苗（福島県南相馬市）

～東日本大震災の被災地から全国へ、多様な苗木を届ける生産者～

有限会社上原樹苗は、明治初期に桑苗を生産したのを始まりとして、昭和30年頃には造林用苗木の生産を開始しました。平成23年の東日本大震災では、社屋、苗畑及び各種機械の多くを津波で失う被害を受けながらも事業を継続し、コンテナ苗生産や作業の機械化等による効率化を進めました。また、周辺の被災農家が耕作を断念した農地を積極的に購入又は借り受けて苗木生産を行うことで、土地の荒廃を防ぐとともに事業規模の拡大を図ってきました。その結果、被災前の山行苗木^{ヤマユキナエギ}※の年間生産量は150万本程度であったのに対し、現在では200万本を超えています。

山行苗木としては、スギ、ヒノキ、カラマツ、クロマツなどの針葉樹を主に生産していますが、森林生態系の多様性に対応した苗木供給を目指しており、緑化木等苗木も含めて、針葉樹・広葉樹を合わせ常時100種類以上の樹種を生産する体制を築いています。本数・樹種ともに類を見ない規模へと成長を遂げた同社の販路は全国にわたり、各地の需要に応えています。

さらに、女性の活躍にも力を入れており、正規雇用職員の約7割を女性が占めています。重量物を扱う作業については可能な限り機械化を進めるとともに、専用の休憩施設やシャワー室を設置するなど、女性に働きやすい環境づくりに努めた結果です。加えて、育児介護休業規程など、長く働き続けることができるよう各種制度も整備することで、安定した雇用の確保を実現しています。

独自に最適化した培土の配合、改良を重ねた作業機械、コンテナ苗や早生樹の育苗、栽培方法のデータベース化等、様々な技術を保有した同社は、苗木生産者にとどまらず、造林・伐採を主とする事業体も含めて全国各地からの視察を受け入れ、育苗技術の普及に努めています。苗木供給だけでなく、地域に合った植栽樹種の提案など、苗木ビジネスの展開を牽引する存在として、今後更なる活躍が期待されます。

※「山行苗木」とは伐採跡地・裸地などに、将来の収穫を目的にして植栽する苗木。



有限会社上原樹苗の皆様



播種床管理の様子



苗畑を上空から撮影

内閣総理大臣賞

河合 清氏・くに氏（大分県大分市）

～里山整備に繋がる循環型しいたけ生産～

ご夫婦で受賞となった河合清氏・くに氏は、建設業や産業廃棄物処理業等を行う企業を経営していましたが、12年前に経営から退いたことを契機に、しいたけ生産を高齢の兄から引き継ぎました。

前職の経験を活かし、小型建機や施設栽培を積極的に導入するなど、従来の生産方法を独自に改良・発展させていった結果、現在では県内でも有数の生産者となっています。

栽培方法には数々の工夫が凝らされており、露地栽培とハウス栽培を組み合わせた気象条件に左右されにくい収穫量の確保や、散水や通風管理など気象条件に合ったきめ細やかな栽培管理に取り組むことで良質な天白や茶花冬菇^{てんぱく ちゃばなどんこ}※、生しいたけを生産しています。

栽培に使用するしいたけ原木は、地域の荒廃したクヌギ林から採取し、伐採後に更新作業を行うことで里山の再生を図っています。また、放置竹林を整備する過程で発生した竹材を竹チップに加工した上で使用後の廃ほだ木と混合して堆肥化し、近隣農家に配布するなど、環境配慮や地域貢献に努めています。

このような高い生産技術を保有する河合氏は、大分市の生産者組合や原木生椎茸出荷部会で会長を務め、新たな原木供給システムの構築、若手生産者に対する栽培技術の指導、季節的に生しいたけを生産し経営の安定化を図る手法の普及等に尽力しており、今後もしいたけ生産の活性化に向けた地域リーダーとしての活躍が期待されます。

※「冬菇」とは、乾しいたけの規格のひとつで、傘が開ききらないうちに収穫した肉厚で丸みを帯びたもの。亀裂が白いものを「天白」、茶色のものを「茶花」と呼ぶ。



河合清・くにご夫妻



農林水産大臣賞を受賞した茶花冬菇

日本農林漁業振興会会長賞

磯村産業株式会社 倉瀨事業所（群馬県高崎市）

～流域の水源林を守りながら、優良大径材を生産する林業経営体～

磯村産業株式会社の森林経営は、明治時代に烏川流域の広葉樹林約1,036haを薪炭林として国から購入したところから始まりました。創業直後に全域を保安林に指定し、「水を守り 森を守る」を経営理念としながら、森林の公益的機能の維持増進を目的とした整備・管理を継続してきた結果、現在は社有林の約47%が人工林となっています。

長年にわたり、良質材の生産を目的とした取組を継続してきたため、社有林には100年生以上のスギや広葉樹の優良大径木が生育しており、市場には出回らない規格の長尺材等、地域の需要に応じた供給体制が確立されています。また、適期の枝打ち、間伐によって年輪幅の均一な通直材を生産しており、群馬県の優良素材展示会に出品された素材は、これまで最優秀賞を20回以上受賞してきました。

先端技術の活用にも積極的で、タブレット端末を搭載したハーベスタによる造材データの記録、既設路網のデータ管理およびGPS端末による作業員への共有等、作業の省力化に向けて様々な手法を導入しています。

さらに、地上レーザ等による社有林の資源情報の収集とデジタル管理を活用した、プロダクトアウトからマーケットインへの転換による新たな需要拡大も見据えており、今後も水源林の保続的管理や地域林業への多大な貢献が期待されます。



磯村産業株式会社 磯村欽三代



倉瀨事業所の作業員